

## 高校生

## との対話

今年度の「高校生との対話」では、私が相談係を担当していたときに出会った事例の中でも、経過が困難だったものを紹介します。そして、どんな点が困難であり、他にどんな方法があったのか、振り返りたいと思います。

今回は、授業には出られなかったけれど、部活と行事にだけ参加していたAさんとの事例を紹介します。

1年目…不登校から  
部活・行事参加へ

Aさんは、もの静かな雰囲気の子供です。中学校では保健室登校の期間があり

部活・行事だけ参加できる  
Aさんへの支援

公立高校スクールカウンセラー

木村 義子

きむら よしこ 元高校の教員。まずは面談に来てくれたことをねぎらい、ともに過ごす時間を大切にしよう心がけています。

ました。高校入学後は、文化系の部活動に所属し、最初の頃は登校して授業も受けていました。

6月、初めての定期考査が終わった頃から、遅刻・欠席が増えてきました。疲れた表情で相談室に来室し、「教室にいるのがつらい」「人の目が気になる」と話し

ます。部活動は、登校した日はほぼ休まずに参加できていました。

担任は、家庭と連携をとりますが、電話対応は主に父親で、「朝起こすが、起きられない。中学校のときも遅刻が多かった」と話していたそうです。

夏休み明け、いよいよ登校できなくなってきましたが、週に3日くらいは6時間目が終わる頃に相談室に登校し、部活動に参加します。部顧問の話によると、「部活動では部員が普通に接しており、Aさんの居場所がある」とのことでした。また、文化祭やゲーム大会のような催しには、朝から参加ができます。

担任や部顧問には、Aさんが部活動や行事だけ参加することに戸惑いがありました。私は、「たとえ部活動や行事だけでも、学校に登校できていることを認めていきたい」と伝え、担任とともに本人・保護者との懇談の機会をもつことを提案しました。

そして、学校として、①欠課時数や進級のルール、今後の見通しなどを伝える、②事前の説明・注意事項を確認した上で

部活動や学校行事に参加させる、③県主催の試合・競技会には参加させない、という3点を共通理解として、Aさんに接しました。また、Aさんが相談室で話す内容は、記録にまとめ、先生方にAさんを理解してもらうよう努めました。

10月、Aさん・母親との懇談をもちました。学校のルールを伝えた上で、「部活動や行事だけであっても学校に登校できることを認め、学校・家庭が連携してAさんの今後につなげる支援をしたい」と伝えました。母親は、「学校での活動をもとにして、今後について考えたい」と話しました。Aさんは家庭で、好きな科目の学習をときどきしていることもわかりました。

3学期も、相変わらず週3日ほど、6時間目の終わり頃に登校し、部活動だけ参加していきます。相談係との話の内容も、次第に家庭の話が増えてきました。「母親は仕事ばかりしていて、家にない」「父親と自分で家事を分担している」「母親は成績がよくないと認めてくれない」「近くにいる祖父母の畑の手伝いをし

ている」などです。私は、Aさんができていることを認めつつ、担任と連携して今後の選択肢を挙げていきました。

Aさんは「もう一度1年生をやり直す」との意思でした。そこで私は、「2回目の1年生で、もし今年度と同様に教室に行けなくなった場合は、転学など別の方法を考えよう」と提案しました。

## 2年目：2回目の1年生

6月までは、順調に教室で授業を受けることができましたが、その後は昨年と同様で、週2、3日の6時間目登校と部活動のみの参加になりました。

私は、担任とともに家庭訪問に行きました。家庭訪問は、担当している生徒の家庭での姿を想像できる貴重なチャンスです。

Aさんの家庭は、何か寒々とした感じがしました。壁に開いている穴は、Aさんが母親と大げんかした際、物を投げた跡だと父親が説明します。Aさんにとつて、家庭は緊張を強いられる場所なので

はないかと思いました。

Aさんは新しい担任とうまくいかず、家庭からの連絡が私のところに回ってくるようになりました。担任や部顧問と連携し、進級にかかわる状況を伝えるのは骨が折れる仕事でした。しかし、Aさんの話を根気よく聞きながら、「部活動だけでも学校に来ることができればいいものだ」「勉強が好きで、高校卒業の資格を取得したいのであれば、今の高校でなくても学ぶ方法がある」と話していききました。少人数で、自分の実力や力量を認めてくれる場があれば、Aさんのもてる力が出せるように感じたからです。保護者にも定期的に学校での様子を伝え、Aさんに話したのと同じ内容を伝えました。

夏休み、Aさんは、宿泊を伴う学校行事に参加したいと申し出てきました。学校としては、①その行事についての説明会への参加、②Aさんが受診している医療機関との連携の2点を確認した上で、参加を認めました。学校と医療機関との連携は、その後のAさんの支援に活かす

ことができました。

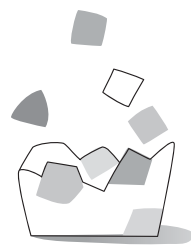
時には、現実を突きつける私の発言がAさんに厳しく響き、母親からのクレームが出たこともありましたが、2学期末には親子ともに「来年は、部活動を続けながら、高等学校卒業程度認定試験（高卒認定試験）を受け、大学受験に挑戦する」という方向に固まりました。

### 3年目：高卒認定試験から大学受験へ



3年目になり、相変わらず週2、3日の6時間目登校、部活動参加でしたが、高卒認定試験に向けての受験勉強が始まりました。年2回実施の高卒認定試験に合わせて、過去問を調べて解くなどの準備をしている様子が伝わってきました。また、同時に大学受験の手続きもしていく必要があります。今年度の担任や進路担当の先生と連携しながら、Aさんと準備を進めていきました。

Aさんは、「昨年のうちに高卒認定試験を受験しておけばよかった」と悔やみつつ、家族にも協力してもらいながら受験



し、全科目に合格することができました。大学入試も、同じ学年の部員と励まし合いながら、必要な科目を勉強し始めました。

3年目の最後の懇談で、Aさんは「教室で授業を受けることはできなかったが、部活動に3年間出席し、行事にも参加できた。大学進学に向けて、母親のためではなく自分のために頑張りたい」と話しました。

Aさんは、高校に3年間在籍し、次の進路に向けて巣立っていきました。

### できていることを認め、そこから次の手を考える



Aさんのケースは、「教室には行けない

が、部活動・行事には参加できる」という特殊なケースかもしれません。しかし、「居場所と感じられるところだけ参加する」「成績や評価を伴わない場面を選んで参加する」という生徒は今後も見られることでしょう。「学校に登校できること」「その生徒とのかかわりの時間がもてること」とポジティブに受け止め、その機会を活かして信頼関係を築くことが、その後の経過に大きく影響してくると思います。

Aさんの場合は、本人が学習への意欲をもち続けたことが、進学につながられた大きな要因だと思います。また、相談室や部活動を拠点にして信頼関係を構築できたこと、父親や祖父などAさんを支えてくれるリソースがあったことも、要因の1つだったと思います。

今回の事例を通して、学校という場がもつ意味は授業以外にもあるのだと感じました。「できていることを認め、そこから次の手を考える」という柔軟な姿勢は、これからの学校教育相談に必要な視点ではないかと思えます。